

乱歩と地方都市

モダニズム

小松 史生子

江戸川乱歩は三重県名張で生まれ、多感な少年時代のほとんどを名古屋で過ごした。今日、乱歩といえば、大正末期から昭和にかけてモダニズム都市として発展した東京を描ききった探偵作家というイメージが強いが、彼が帝都東京のモダニズムの波をその作品世界に的確に描ききることが出来たのは、その精神構造の基盤に、自身が都会者ではない、地方から流れ寄ってきたヨソ者であるという意識が在ったからともいえる。それは、或いは日本の近代文学が明治以降、その主流として基本的には地方出身者によって形成されていった経緯に連なる自意識であったとも考えることができるだろう。

しかし、乱歩がユニークなのは、その

作品世界はもちろん、その生涯の軌跡において、みごとに三重、そして名古屋というふるさとの匂いをただよわせはしないばかりか、およそ東京以外のどこの土地の風土をも感じさせない——東京以外の土地を舞台にした作品も幾つか書いたにもかかわらず——まさに「東京を描いた探偵作家」としか言いようがない点である。乱歩といえば東京、というのは、実に正しい指摘なのである。そしておそらく、この点にこそ、たぶん矛盾あるいは逆説的な言い方にはなるかもしれないが、乱歩が名古屋出身という、その生い立ちが影響している気がしてならない。乱歩が少年期を過ごした名古屋という土地は、俗に「維新の汽車に乗り遅れた」と評され、政治経済の上において中央進出を大々的には果たし得なかった感をもっている。とはいえ名古屋は、東西南北に挟まれた交通の要地で、尾張徳川家の城下町としての伝統もあり、けっして軽々しく無視されたりする土地ではない。しかるに、この交通の要地という点で、名古屋の場合は近代化日本の動きの中で、かえって表層的に文化が素通りするパイプ地点と成ってしまったのではなからうか。

名古屋は東西の文化の情報が入ってくるのは早い。しかし、入ってくるのが早いということは、つまり流出するのもし早いということだ。つまりは、情報はいちはやく入り、そのことよって人材は生まれるが、その優れた人材が恵ま

れた交通面によって外へ流出しやすいという二面性を持つているのである。

乱歩の少年期の名古屋は、中央から発信される文化情報が、東海道に沿った鉄道路線の誘致と共にモダンニズムの波となって急激に押し寄せた時代だった。それまで、街道沿いの熱田に賑わいの大方を持つて行かれていた名古屋は、鉄道の誘致によって熱田を凌ぐ機会を得て、やがて熱田を統合して地方のモダンニズム都市としての地位を急速に確立していく。大規模な博覧会が名古屋を舞台に数多く開かれ、「名古屋は博覧会で大きくなった都市」とさえ言われるようになる。名古屋政財界の大勢力だった奥田正香は、そんな名古屋の文化面を切り開く大博覧会の主催者として活躍した人物で、乱歩の父の平井繁男はこの奥田正香の商店を預かる支配人だった。さらに言えば、奥田正香は、保守的で地元の人材を優遇する旧来の名古屋の商法に反して、名古屋以外の土地から積極的に人材を採用する実業家であった。地元派と外様派という派閥に分かれて、時にせめぎ合い、時に妥協し合いながら発展しいった名古屋の経済界の動向が、そのまま名古屋のモダンニズムの浸透速度を左右したとも言える。

乱歩の作品世界で、しばしば合理科学的なメカニズムが前近代的な闇の中に、突如降ってわいたかのようにアンバランスで奇体な出会いを果たすのは、

まさに、展覧会という一大モダンニズムの祝祭を、少年時代に名古屋という新旧せめぎ合う土地で初体験した、地方都市モダンニズムの状況を原風景として所有している乱歩にして捉えうるイメージであったのかもしれないのだ。

ところで、名古屋という土地は、乱歩以降にも、なぜか探偵作家を多く生み、育てる場所であるようで、名古屋に出自を持つ、あるいは何らかの関わりを持つ作家は多い。そしてまた、ジャンルを超えても、かつて坪内逍遙が、そして二葉亭四迷がこの土地で過ごしたように、日本近代文学の黎明期とも深い関わりを持つ土地柄でもある。おそらくは、言及されないこと——そのこと自体がまさに名古屋という土地の孕む文学的トポスのスタンスであるのではなからうか。皮肉でもなく、卑屈でもなく、そうした名古屋のスタンスのありように、大乱歩を産み落とした地方都市モダンニズムの面白さをしみじみと感じるのである。

(金城学院大学文学部准教授)